

ザ・グレート展開予測ショー【二〇〇六・夏企画】最高賛成票数獲得作品

花火と夏の思い出を

長岐栄

コトン
小さな音を立てて、高級そうな机の上に良く冷えたアイスコーヒーが載せられた。

グラスがほどよく汗かく季節。

世間一般ではそれを夏という。

「とまあ、そういうわけなんで休ませて欲しいんですが」

クセツ毛を赤バンダナで押さえつけ、上下デニム、ではなくて、珍しくライトグリーンの半そでポロシャツの少年が、ダクダクと冷や汗流していた。ここは毎度おなじみバイト先だ。

「へえ」

目の前にいる雇い主はデスクの上で苛立たしげに指をトントン叩いている。

亜麻色の長い髪が特徴的な美貌の才女、業界でトップクラスと呼び声も高いゴーストスイーパー美神令子だった。

「あのねえ、横島くん？ この業界がこの時期忙しくなること分かって言ってる？」

こめかみに青筋浮かべた状態では、その美貌も恐怖を助長するエッセンスにしかなくなっていない。

「あう、あう、二日ほどでいいんです」

「み、美神さん、横島さんだって都合があるんですし、その分、私が頑張りますから」

横ではさつきまでアイスコーヒーが鎮座していたお盆を抱き

しめ、横島同様に冷や汗流すのは涼しげなピンクのキャミソール姿の黒髪美少女が助け舟を出していた。

「あ、ありがとうおキヌちゃんっ」

ギリギリの恐怖体験に救いの女神、横島は隣のバイト仲間の少女を女神でも見るような眼差しで伏し拝まんばかりだ。

「ったくっ、おキヌちゃんにまで言われたんじゃ仕方ないわね。で、いつ何処に行くのよ？」

結局なんだかんだで美神が折れた。

怒っていても全くの分からず屋ということは無。いささか意地っ張りの気はあるが、根は素直で優しい女性でもある。

普通の人間はその最奥の手柄に気づくことがない。悪辣な表面で評価されてしまう辺りが彼女の損な性分だ。

「その、8月1日に大阪です」

ガタツ

「8月1日の大阪ですって？」

美神は思わず椅子を蹴って立ち上がった。

「はい、企画した奴がその日の花火大会を目玉にするって聞かないすよ」

「ちよつと、あんたそれって12万発の花火がウリのあの花火？」

確かその日は大阪で日本最大級の花火大会があるはずだ。

一応世間ではかなり有名な祭典である。

「は、はい、その花火です」

「はあ、同窓会に花火ね。でも、それならちよつと良かったわ」

彼女はそういうと再び腰を下ろして、デスクの引き出しから一枚の書類を取り出す。

「へっ」

なんか、非常に見慣れた書類に少年の常人離れた第六感が警鐘を鳴らす。

「ちよつとその日にね、横島クンの行く花火大会絡みの除霊依頼があるのよ」

とても、とても晴れやかな笑顔だった。

「はこっ」

「もうね、先方の指定が高校生位の男女一組が望ましいとか、えらい条件ついてて、横島くんとおキヌちゃんに行って貰うしか無いなあって思ってたの」

「あの」

「ホントちよつと良かったじゃない。いいわ、ここはドーンと出張経費で電車賃を出してあげるから行ってらっしゃい大阪に」

「いや、あの」

「じゃ、横島くん頑張つてね」

その満面の笑顔に、確定的な未来が見える。

「な、何をでせうか？」

もはや聞くことすらむなしくもあつた。けれど、横島もささ

花火と夏の思い出を

長岐栄

挿絵 六条一馬

外の景色が強烈な速度でカッ飛んでいく。

そんな走行速度でほとんど揺れないというのは、実に日本の新幹線は優秀であると切に感じる。

「で、おキヌちゃんも来るとちゅうわけか？」

グラサンかけて、明るい茶色のサラサラ髪を帽子に押し込めた少年が困ったような顔で言葉を搾り出していた。

垢抜けたカジュアルシャツにセンスの良さが光る。

見る人が見ればそのサングラスの下に隠された顔に黄色い悲鳴が上がることだろう。

そこにいるのは横島の幼馴染にしてアイドル役者、近畿剛一こと銀一である。

「言うな銀ちゃん」

隣に座る我らが横島は疲れきった声で昔からの呼び名を搾り出して、あしたのジョーよろしく座席で真っ白に燃え尽きていた。

「あは、あははははは……」

突っ伏した横島の更に隣で冷や汗貼り付けたおキヌが乾いた笑いを浮かべていた。

可愛らしくも派手ではないピンクのワンピースに身を包んでいた。

滅多に乗ることはない。というより横島は乗ったことの無い新幹線のグリーン車だ。

三人がけの座席は、窓際から順に銀一、横島忠夫、氷室キヌと座っている。

「何が悲しゅうて同窓会のついでに除霊しにいかなかんねん」

「わ、私まで来ちゃつて良かったんでしようか？」

おずおずとおキヌが申し訳なさそうに隣の横島に問いかける。

「いや、おキヌちゃんが居なかつたら気が滅入っちゃうよ。銀ちゃんと二人だけはキツイ」

「マテや、横つち、俺と二人はそないに嫌かつ？」

「いや、だって、お前男前だし」

「どないな理由やねん!？」

「お前みたいな絶賛モテモテ野郎と思春期以降に仲良うできるかあつ！」

「ま、まあまあ、横島さんも近畿クンも落ちついて」

「あ、おキヌちゃん、ちよおすまんねんけど」

サングラスの少年は周りをはばかりるように声を潜めている。

「はい？」

対するおキヌは小首傾げる。

「そのな、色々面倒やから俺呼ぶ時は『銀一』で頼むわ」

ウインクしながら、両手合わせてお願いされる。年頃の少女なら一撃必殺だ。

人気アイドル・近畿剛一。ブレイク以来人気は衰えていない。出世作『踊るゴーストスイーパー』で、銀一が扮していた、

横山GSの『大阪府知事と同じ名前やった横山ですっ』のフリーズは中高生を中心に大ブレイク、一時は社会現象にまでなった。

万が一、ここにその本人が居るなどと一般人にバレたら大事になるだろう。

「あ、はい、それじゃ、銀一さん？　でいいですか？」

「はっ、さすが人気者様は言う事が違いますなあ」

嫉妬に満ちた。既に憎悪の領域まで高められた眼光で持つて隣の銀一を見据える横島がいる。

「そ、そないなこと言われても」

殺気混じりの声音に思わず銀一も震え上がる。

「横島さん、それはちよつと言いすぎですよ」

メツと軽く責めるような上目遣いが横島のハートにさつくりと突き刺さった。

「うううう、おキヌちゃんまで、おキヌちゃんまでええええええ」

前の座席のケバをいじくり始めた横島が非常に見ていて切ない。

「え、えつと、それで横島さん達と同窓会に私が行っていいんでしょうか？」

「おキヌちゃんは仕事やろ？　なら、堂々としとつたらええんやつて。俺らから小学校以来会ってへんさかい」

言いながら銀一は人懐っこい笑顔を浮かべる。これは女性に

横島の隣で小さくなって座っている少女をにサングラスの下の目を向ける。

『おキヌちゃんて、そないに強いんか？』

門外漢である銀一には容易に推し量ることはできない。

「おキヌちゃんの能力は霊団に対して相性がいいんだよ」

「霊団と相性のいい能力？」

「おキヌちゃんは世界でも数人しかいない超一流のネクロマンサーなんだ」

その言葉は、単純な霊力が除霊を左右するわけではない事を知っている。傍らに立つてきた経験に裏打ちされた確信的信頼がある。

「悪霊とか未練残した幽霊の気持ちを癒して浄化できるんだ。こゝと、霊団相手にするのにおキヌちゃんほど頼りになる霊能者はいないんだぜ」

まるで自分のことのように得意満面に横島は語る。

『こういうトコが横つちの株上げてるんやろなあ』

さりげなく関係ない事を思いつつも、銀一は聞いた内容を消化して何度もうなずいていた。

「なるほどなあ、そら凄いわ」

素直な感心と共に横島の向こうにいるおキヌを見やっていた。

「そ、そんなことありませんよお」

恥ずかしそうにすっかり恐縮してしまっている。憧れの芸能

対しては悩殺技である。

「それにせつかくの花火大会やねんから役得や思て、一緒に楽しんでつたらええねん、誰も気にせえへんて。みんなで楽しかったらそれでええんや、大阪人はノリが命やからな」

「はあ」

今ひとつまだ浮かない顔の美少女はとりあえず置いて、銀一はその隣でケバをむしる旧友に目を向けていた。

「んで、横つち、今回の除霊つてどないな相手なんや？」

軽く身を引きつつも、隣の横島に話を振りなおす。

ドラマとはいえ、GS役をやっていただけにその辺りは気にせずにはいられないようだ。

「ん？　ああ、今回の相手は霊団つていって、単体だったら雑魚もいとこなんだけど、核になる存在が複数の雑魚霊取り込んで、まあ、要は合体して強化した存在だよ」

ようやく正気に戻ってきた横島が簡単に噛み砕いて説明する。「潰しても、潰してもそこらにいる雑魚霊取り込んで再生するからタチ悪いのなんの」

「なんや、えらい大層なやつちやな」

少し話を聞いているだけでも倒す方法があるのか疑問に思えてくる。

「まあ、相手が相手だからな。おキヌちゃんは絶対必要なんだよ」

「へえ？　また何でや？」

人の感嘆の声、そして、想い人の信頼の言葉が少女の心をくすぐっていた。

「で、今んとこ、その霊団は何故だか学生カプトルばかり狙うんだよ。今でこそ沈静化してるみたいなんだけど」

ため息を一つつく。

「今晚大勢、まあ、来るだろ。それきつかけに出てくる可能性が高いつて事で、大事になる前に」

「横つちとおキヌちゃんの出番て訳か」

聡い銀一がすかさず言葉を継ぐ。

「そ、だから、俺は出張のついでに同窓会に参加しに行くようなもんだわな」

「で、でも、良かったじゃないですか。美神さん電車賃も出してくれましたし」

タタンタタン　タタンタタン

列車の走行音がやたら良く聞こえる。

なんというか、切ない沈黙だった。

「おキヌちゃん、同窓会に行くから休みくれって言ったら、ちようどいいから仕事やって来いと言われる気持ちつてどう表現したらいいのかな」

空は無いのに虚空を見上げる横島が涙を誘う。

「え、えくと」

「まあ、ホントにせめてもの救いはおキヌちゃんが来てくれたこ

とやなあ」

改めてしみじみ横島が独白していた。

「えっ?」

予想外の言葉に一瞬目を白黒させて、おキヌは頬を軽く朱に染める。

「まあ、なんていうかさ。苦手な奴が居るんだよ。癒されないと俺死ぬし」

ぼりぼりと後頭部をかく。

「なんや、横っち、もしかして『夏子』の事か?」

「え?」

銀一の口から出た女性の名前に一瞬おキヌの思考は固まった。

女性に関する事で横島が行動を躊躇するというのはあまり無い。

「ん、まあな」

「横っち、今回のことは夏子が企画してくれてんねんからな」

「わあつてるよ。ただなあ、なんつーか、あいつ性格きつつからなあ」

この世で最もきつつい性格をした除霊師の元で働いておいて何を言うのだろうか。

そんなこんなで三人を乗せた新幹線は一路大阪目指して疾走していくのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『左側のドアが開きます。ご注意ください』

新幹線の車内にはアナウンスが流れて、しばし時が流れる。ぶしゅ、バタン

二時間半の旅を終えた三人は開いた扉をくぐって駅のホームへと降り立つ。

看板に『新大阪』と大書きされた新幹線の駅ホームが三人の足場だった。

「おお、着いた着いた、ふあゝあ」

伸びをしながら横島が欠伸を隠そうともしない。

「は、ここが大阪なんですわ」

おキヌはしきりに感心している。周囲を見回して、キオスクのお土産物に興味をそそられていた。

「で、こつからどうすんや? 横っち」

横島ほど露骨ではないが、軽く伸びをしつつ銀一が問う。

「俺らはここで案内の人と合流して除霊現場直行だよ。つっても目的地は銀ちゃんと同じなんだけどな」

横島も言いながら、困ったように苦笑いする。

「じゃあ、結局、お互い富田林やな?」

「そーゆーこと」

「やつたら、お互い御堂筋線つこて天王寺乗り換えがええやろ?」

「お前もしかして?」

横島は慄くように身を引いた。

「夏子か!」

そして、銀一は嬉しそうに身を乗り出した。

「やつぱし、横島と銀一やつ、ひっさしぶりやな」

少女は元気のいい声と全身で喜びを表していた。

軽い足取りで横島たちのところへ駆け寄ってくる。

明るい笑顔が浮かぶと瞳はいつそう輝きを増していた。

「へえ、この電車で来たんや、偶然やな」

「つて、お前、何でここに?」

「今日は学校の用事で人迎えにきてんねんよ。そしたら、どっかで見たような変わりないちゅうか成長の無い人影が今現在目の前に」

「そりや、一体どういう意味じゃあああああつ!!」

思わず絶叫する。

「そんなんうちの口から言わせんといてえな」

コロコロ笑いながら結構ぐい口を叩いている。

「それにしても、あんたらって見事なくらい対照的やなあ、美形アイドルとお笑い芸人の対比ちゅうか」

二人をまじまじと見て、とても楽しげだった。

「ほつとけつ!!」

横島が思わず声を荒げる。どつちがどつちか確認するのバ



からしい。

「あ、あの〜」

隣で所在無さ気にしていたおキヌが困ったように声をかける。

「ん？ お連れさん？ えらい可愛い女の子やけど、もしかして

銀一の彼女か？」

からかうような夏子の一言でおキヌの顔がポフッと爆発する。

「ち、違いますううううう」

両手をわたたと振って、必死に否定する。

憧れの芸能人とカップル扱いされるのはおキヌとして悪い気はしない。しかし、今は間が悪いというか本命が隣に居ると言うか、微妙な乙女の事情がある。

「ちやうちやう、この人は横つちのバイト先の人やで」

パタパタと手を振って、苦笑しながら銀一が訂正する。

「え？ あ、ああ、横島の？」

一瞬、戸惑って、一転ニパツと微笑む。

「えと、うちはこの二人の昔馴染みで『藤井 夏子』言うねん。よろしくな♪」

印象的な笑顔でもって自己紹介する。

「あ、はい、氷室キヌです。よろしくお願ひしますね」

柔らかな笑顔を添えたおキヌもペコッと笑顔で頭を下げる。

「けど、横島のバイト先の人で、何でここに来てるん？」

ひとしきり首を傾げてパチクリと目を丸くする。別にイヤミ

でもなんでもなく当然の疑問だろう。

小学校の同窓会にバイト仲間がくることは異常以外の何物でもない。

「俺、今回は仕事付きなんだよ。同窓会行くから休みくれば言ったら、ちょうど大阪に仕事有るからついで行って来いってさ。で、おキヌちゃんはその仕事で一緒なんだよ」

「はあ〜、また、変な事情やね。それにしても、あんたのバイト先で、鬼か？ 普通のバイトはちゃんと休ましてくれるやろ？」

冗談めかした軽口が、横島をビクツと震わせる。

「鬼？ いや、確かにあの人の日常的な行状を客観的に分析するなら」

横島は思わず頭を抱える。

「その辺はノーコメントだな」

えらく遠い目で呟いていた。

「あ、あはははは……」

横島の微妙なセリフに隣のおキヌも冷や汗流し、乾いた愛想笑いを浮かべるしかない。

「けど、大阪までわざわざ仕事って一体何のバイトしてるん？」

「おお、それそれつ、夏子、聞いて驚け。横つち、GSやってんねんぞ」

銀一がさも楽しそうに、彼の現状を紹介する。

「へっ？」

「それも日本でトップクラスや言われてる美神除霊事務所働いてんねんで」

「え？ ええっ、マヂでっ！ ウソやろっ!?!」

銀一の言葉に予想以上の反応が返ってきた。

「何じゃその反応はっ、俺がGSだったら、そんなに違和感あるつちゆうんかあっ!! 『そんな花形仕事は横島じゃない』とか手紙でぬかすかあっ!?!」

「いや、せやなくてっ」

一声上げると、慌てた様子で手提げカバンから携帯取り出し、キーを叩き始める。

ピッ

チャラツチャラチャラツチャラッ

ルパン三世のテーマソングが横島のポケットから鳴り響いていた。

「え？」

「マ、マヂなんや」

夏子は呆然とした様子で、横島を見る。

「横つちっ？ どういうこつちや？」

銀一も困ったような顔で隣の横島を見ている。

「ええと、さ。おキヌちゃん、確か案内の人って？」

救いを求めるようにおキヌに視線を投げる。

「私たちの電車が来る時間に横島さんの携帯電話に連絡、でした

「まったくやで」

横島の言葉の表面に銀一も同意を示す。

「わ、私が行っていいんでしょうか？」

いよいよ持つておキヌは不安そうだった。

「ええねん、ええねん♪ どうせやから同窓会も参加していき♪

こういうのは可愛い女の子多いほうが男子も喜ぶで♪ なあ、

横島

「言つとくけどおキヌちゃんに変なこと手伝わすなよ」

「そんなつもり、うちには無いで。ま、おキヌちゃんくらい可愛

かったらかなりモテモテやろけどな♪」

「え？ そ、そんなこと無いですよ」

あわあわと両手を振つてうろたえる。

実際のところおキヌは他の同世代の少女に比べて、鼻目無しに可愛い。大人しそうな印象も相まって、間違いなく異性にモテる事に疑いは無い。

もつとも本人は女子高に通っている上に、とある誰かさんを一途に懸想していることもあつてその自覚は無いのではあるが、そこもまた彼女の魅力である。

「いいや、絶対に結構口説きに来る思うでっ、うちのクラス男子はやたらエロエロやつたからな。もつとも」

夏子は少し意地の悪い笑みを浮かべる。

「原因は間違いなくこの横島やけど」

ね」

「事实は、時として無慈悲なものである。

『まもなくのぞみ184号博多行きが到着します。危ないですから白線の内側まで下がってお待ち下さい』

むなしくアナウンスが鳴り響く。

新大阪の駅ホーム、この一角だけを気まずい沈黙が支配していた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ガタンゴトンツガタンゴトンツ

あずき色の車両にページュの横一線、関西ローカル鉄道・近鉄電車の車体が大阪の町並みを走り抜けていた。

東京の列車に比べるといささか横揺れを実感できる。

車内で座席の一角を占領した少年少女が各々思うところを微妙な表情で述べていた。

「いや、ホンマ、ビックリしたわっ♪」

言いながらケラケラと楽しそうに夏子は笑う。

「ビックリしたのは俺のほうだよ。まさか除霊現場が夏子の学校かよ」

横島は頭痛でも起こしたように一人だけ重苦しい空気を背負っている。

容赦なく横島の方向を指差していた。

「ぐっ、このっ」

「すまん、横つち、その辺りは俺もフォロー不可能やわ」

「横島さん？」

おキヌのジト目がさつくり突き刺さる。

「いやあああ、おキヌちゃん、そんな蔑んだ目で俺を見やんでくれっ」

騒ぐ横島を尻目に、ふと夏子の目が悪戯っぽく笑う。

「あ、この際、ついでやから言うとくけど、同窓会の会場もうちの学校やで？」

夏子はあつさりとお楽しみな事をのたまっていた。

「は？」

完全に予想外右斜め45度の攻撃が横島と銀一を襲撃した。

「ホンマはうちの学校って場所が場所やから、花火の日は閉鎖されんねんよ。でも、うち、生徒会役員やつててな。除霊師の案内するて言うたら、特別に開放してもらえたんや」

エッヘンと胸を張る。実に自慢げだ。

「ちよつと待て、お前、まさか除霊直後の現場で同窓会開く気かっ!?!」

「そやでっ、うちの学校で、あの塔の近場やで使わんでどうすんねんな？」

事も無げに言うと、横島の肩をポンツと叩いた。

「日本一の除霊事務所の看板背負って来てんやから、期待してるで横島♪」

「変なプレッシャーかけんじゃねえええええ」

涙混じりの抗議の声が入り入れられることはついに無かったそうである。

電車はひたすら容赦なく4人を目的地に向かって運んでいくのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ほい、到着、ここがうちの学校や」

「うーん、コレはまた」

「風情があるというか年季入っているというか」

横島と銀一がお互い微妙な表情でコメントしていた。

目の前の建物、いわゆる普通の公立高校だ。

『かもし出すオーラというかなんというか、何年物だよ?』

二人は思わず、時代を値踏みしてしまう。

正面玄関には大きな階段があり、本館二階がロビーらしい。

「まあ、創立80周年やからね」

「つて、戦前からあるのかよ?」

夏子の気軽な解説に、横島は大仰に驚く。

「敷地はな。そんな頃は女学校やってんで、駅の反対方向にある学

校、その分校つて扱いで」

「それはまた」

首をひねる。

『年季が入るわけだよな』

「ま、建て替えはされとるから、校舎は鉄筋コンクリートやさかい頑丈やで」

彼女はそういうが、軽く築〇十年クラスであることは間違いないだろう。

『俺らが生まれる前からあるよな。間違いない』

門をくぐって敷地に入る。既に学校帰りの姿なのだろうか、

夏子と同じような制服姿の生徒、一般的な夏の学生服な男子学

生達が外に出て行く人影として多く見られる。

「今日は部活も午前中までやねん。せやから、制限時間は昼から夕方くらいまで」

「その辺りは依頼書でも聞いているから大丈夫だよ」

「おー、あの宿題忘れの王者・横島が、ちゃんと予習しとるつ」

夏子はことさら大げさに驚いてみせる。

「お前、俺にけんか売ってんのか?」

半泣きになりながら、口の端をヒクつかせていた。

「じゃあ、他のGSが返り討ちに遭うてる言うんも」

「聞いているよ。でなきや、大阪まで出張る仕事か美神さんの所に

来る事もないだろ?」

それにつられて夏子と銀一の視線もおキヌに集中した。

「へえ、そうなんや? おキヌちゃんが凄いや」

驚きの眼差しで自分と同じくらいの歳の少女を振り仰いでいる。

「そ、そんな凄くないです」

いきなり話を振られ、おキヌは大慌てで首を振っていた。

「凄いや。何せおキヌちゃんは普通の『除霊』よりはるかに難度の高い『浄霊』を得意にしてんだからな」

「浄霊?」

夏子と銀一が首をかしげる。

「いわゆる除霊って言うのは悪霊を無力化するまで攻撃して霊的中枢を破壊して倒すか、弱らせたところを吸印札とか破魔札使つて祓うだけだな」

ちよつとした講義のように軽くニツと笑いながら横島は語る。

「おキヌちゃんは特殊な笛で悪霊の攻撃意思をなだめて、自発的な成仏に導くことが出来るんだ。それも複数同時に」

「さつき新幹線で言うてた話か?」

銀一も思い至つたらしい。

「それつて、メチャメチャ凄いやんやうんつ?」

「そりや、凄いや。普通の除霊とは格段にレベルが違うんだからな。コレが出来る人間はICPO超常現象対策課でも5人くら

いしか把握してないらしいし」

「はあああつ」

夏子は感嘆の声を漏らすとおキヌちゃんを眩しそうな尊敬の眼差しで見ている。銀一もただただ感嘆するしかできない。

「そ、そんな大した事じゃないんです。単に私にとっては他人事じゃないだけですから」

真つ赤になつて、おキヌは言葉を搾り出す。

「他人事や無い？」

眩しさの薄れた当たり前の疑問に、おキヌもホツとしたように微笑む。

「はい。私、以前は幽霊だったんです。300年前人身御供になつてから割と最近まで」

そして、気軽に天気の話でもするような明るい口調で、普通じゃない事を言ってくれた。

「へ？」

夏子と銀一の目が点になる。

「おキヌちゃんは300年前に妖怪を封印する呪術装置を動かすための生贄になつたんだ。で、妖怪を片付けることが出来たら、開放されて生き返つたって訳さ」

苦笑しながら横島が補足する。

「い、生き返つたて」

表情をこわばらせた夏子が声を絞り出す。

「あるんか？ そういうことが？」

「とんでもない話やな」

銀一が慄く。呆気にとられたままの二人は話を聞いていた。

「だから、私、迷う幽霊の気持ちは良く分かるんです。私もそうでしたから、生きてるって事が素晴らしいことを鮮明に思い出したから、成仏して転生して欲しいんです」

それがごく当然のことといわんばかりの当たり前の笑顔だった。

「まるで幽霊のカウンセラーやな」

ため息漏らさんばかりに夏子が呟く、おキヌを見る瞳にこもっているのは畏敬の念。

「そんな大した事はできないんですよ」

わたわたとテレながらも謙遜している辺りが実に彼女らしい。

「そんでもつて、俺とおキヌちゃんとは幽霊時代からの付き合い合いなんだよ」

横島が軽い口調で口を挟む。

「はい。でも、幽霊時代ってなんだか懐かしいですね？」

楽しいにおキヌが返していた。

「死んでたのに明るかったよなあ〜おキヌちゃんは」

「あ、横島さん、なんだかその言い方ひどいですよ」

おキヌはぶうつと頬を膨らませて、口の先を尖らせる。

「ごめんごめん、でもさ、おキヌちゃんが居てくれたおかげでずいぶん助かったよなあ」

銀一もそこから二の句がつけない。とんでもない話を聞いて二人は啞然としていた。

「まあ、普通の人は生き返れんわな」

横島もさすがに苦笑していた。

「なあ、『反魂の術』って聞いたことあるか？」

「あ、ああ、映画とかで見たくらいやけど、よお失敗してバケモンになるやつやろ？」

銀一がつい答える。しかし、その映画解釈はあながち間違つてはいない。

「そ、失敗するのが当たり前の術。だけど、おキヌちゃんは、唯一の完全な成功例なんだ」

「マ、マヂで？」

二人はビクリまなこで慄くしかない。

「はい、でも、私は300年前に死ぬと決まった時から道士様が準備してくださつてましたから本当に恵まれてました」

「で、こつからは美神さんからの受け売りなんだけど」

聞きかじりながら横島が補足する内容を話します。

「邪霊を寄せ付けない結果、生命力に満ちた若い女性の魂、欠損なく完全な形で保存された本人の肉体に、十分な地脈の力、全てが揃つていたから成功したつてね」

「そりやまた何とも」

夏子が唸る。

「え？ あ、そ、そんなことないですよ」

一転、頬を染めて、両手をパタパタ振っていた。

「いや、おキヌちゃんが俺の飯作りに来てくれなかったら、俺は確実に餓死してた自信があるつ」

涙流し拳握り締めて力説する横島に、夏子が慄くように後ずさり、銀一がコケを披露していた。

「ど、どないな生活しとつてん」

冷や汗流しながら夏子は言わずに居られない。

「あの頃は仕方なかったんやあ〜、親父もお袋も仕送りギリギリにしゃがるし、美神さんとは時給250円やったしつ」

「に、250円つ!?!」

血の気の引いた顔で銀一も後ずさる。

「ろ、労働基準法つて知つとるか横島？」

更に冷や汗流して夏子も聞かずにいられなかった。

確か世間では最低賃金は時給680円位に設定されているはずである。

「あの人、そういう世間の常識つて関係ないから」

横島はどこか達観した顔で空に向かって呟いていた。

「本気で鬼か、あんたのバイト先？ 悪徳金融でももうちよい待

遇えんちやうか？」

毒舌少女がごく当然の疑問を口にする。

「ノーコメント」

その先は答えられない、というか、答えたら殺されそうだ。とはいえ、今ではその待遇も相当に改善され、横島も生活費でピーピー言うような事態はほとんど無くなっていた。

「あ、な、夏子さん、あの白い塔なんですか？」

おキヌは目的地方向にまっすぐ聳え立つ白い凸凹の塔を指差してたずねていた。

話題転換のネタ振りに横島が心で親指を立てる。

『ありがとう、おキヌちゃん。ナイスフォローだっ』

それはさておき、おキヌが指差した先、それはここから見える田舎そのものの住宅街には、えらく違和感ありありな建造物だった。

「あー、あれな、アレが今日の花火大会がある塔やねん。人差し指に見立ててデザインされとるそうやで、その名も大平和記念塔っ」

「は〜」

夏子の説明におキヌはしきりに感心している。

「元々宗教団体でな、8月1日はその教祖祭、12万発の花火が打ち上げられんねん。教団関係無し文句なしで日本最大の花火大会やね。同窓会の山場やわ」

言いながら夏子は横島たちを校舎の中へ先導していく、リノリウムの廊下にずらつと居並ぶ教室たちを前に立ち止まった。

「じゃあ、横島はその教室で着替えたってや」

「あつ、横島さん♪」

「……」

横島は言葉を失っていた。

真っ白なブラウスに紺のリボン、そして、紺色のブレザースカートが小さくはためいて白い生足がのぞいていた。

「……」

「あの？ 横島さん？」

声の主・おキヌの再度の呼びかけに横島はハッと気が付いた。

「お、おキヌちゃんっ、その服っ」

「はい♪ 夏子さんから予備の制服借りちゃいました♪」

両手を目一杯広げてお披露目している。そう、目の前には、夏服仕様のブレザーに身を包んだおキヌが居る。

無邪気にクルリと一回りして「どうですか？」とか言っている。

『し、新鮮だっ！ って、そうじゃなくてっ。でも、新鮮っ』

見慣れた六女の制服とは違う、なんというか王道なその制服姿に目を奪われる。

ドクンツドクンツドクンツ

そして、おキヌの清楚な雰囲気に見事なばかりにマッチしたそのはちきれんばかりの輝きに横島は目を奪われてしまっていた。

「俺はっ、俺は大阪に来て良かったかもしれん」

空を見上げ思わず右拳握りつつ呟いていた。

ごく自然の流れとでも言うように、夏子は横島に手近な教室を指差し『行け』と促す。

「着替え？」

「校内歩いてもらうのに普段着は無いやろ？」

さも当然のように夏子はのたまう。

「除霊に来たのにかっ!？」

そんな、横島のツツこみに構うことは無く、横島用の学生服は教室に用意されていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『しゃあないやん。今んとこうちの生徒しか襲われてへんねんから、それ着んと除霊作業できひんで』

とは、夏子の弁であることなど言うまでも無い。

「うがう、何で大阪まで来て学生服に袖通さなあかんのじゃ〜っ」しばらく葛藤しつつも結局は素直に着てしまう辺りが横島のノリの良さというものだろう。

「だー、くそっ、着たつたぞ、こんちくしょーっ」

そう言つて扉を開けると、

「あつ、横島さん♪」

さらつと黒髪が揺らめいた。

「……」

頬をツーツと感動の涙が流れ落ちていた。

「はい？」

意味が分からずキョトンとするおキヌをよそに、横島には危機が迫っていた。

「うちを見たときと今の反応の差は一体どういう意味や、横島?」

地の底から漏れ出でるような声にビクウツと身体が震える。

横島の研ぎ澄まされた第六感が最大レベルで警鐘を鳴らしている。

「ア、コレハコレハ夏子サンジヤ、アリマセンカ」

振り返ることも出来ずに、壊れた機械のような音声だけ絞り出していた。

「全く、横島がうちのことをどう考えてるか、後で小一時間ほど問い詰めたる」

すれ違いざま言うだけ言うと、半眼を翻して、笑顔でおキヌの方を向いた。

「どないや? おキヌちゃん」

「あ、はい。ありがとうございます。ちょうどサイズも同じ位です」

「そら良かったわ。それにしてもよう似合てるで♪ いつそ、うちの学校に来えへんか?」

「制服のためだけに転校薦めてんじゃねえっ」

思わずツツこんでしまうのが、関西人のサガなのだろう。

「すまん、夏子〜」

別の教室から銀一の声が聞こえていた。

「どしたん？」

「この服もちよつと合わへんみたいやわ」

申し訳なさそうに制服ワンセットを差し出していた。

「分かったわ。じゃあ、次コレ試したつて」

手近な制服を手にとつて、銀一に手渡す。

「サンキュ」

「何で銀ちゃんあんなに時間かかつてんだ？」

「しゃあないやん。銀一は横島みたいな一般既製品サイズが合わ

へんねんから」

ふつと哀れむような遠い瞳で横島を見て夏子は続ける。

「横島と違ごて主に足と胴の長さのバランスが」

「どーせ、俺は胴長短足の一般既製品サイズだよ、コンチクショ

ーっ!!」

血の涙を流しながら、横島の絶叫が響きわたった。

花火と夏の思い出を——中編——

制服姿の男女4名が勢ぞろい。ロビーの円座では横島とおキヌが除霊セットの最終点検を行う。

「さて、行くか」

荷物から烏帽子姿の霊体発見センサー見鬼君を取り出し腕に抱えて、出発準備を整える。

「夏子と銀ちゃんは敷地の外で待ってもらったほうがいいな」

「いややで、せつかくやねんから、うちは絶対ついてくぞつ」

夏子にあつさり反抗された。

「いや、ちよつと待て」

「俺かてついてくぞで、横つちの除霊が見てみたいしな」

銀一もついていく気満々だった。

「ちよ、ちよつと待て、危険だつてわかつて言つてんのか？」

「当たり前や、せやけど、横つちの除霊にはメチャメチャ興味があるつ」

「それにうちの学校のことやで？」

『まいったな、こいつら頑固だもんなあ』

この二人が言い出したら聞かないことは横島も良く知っていた。伊達にやんちゃ時代を共に過ごしていない。

「つたく、しゃーねーな、じゃ、コレ渡しとくよ」

「で、すぐ調子乗るトコは全然変わつてへんねんな」

夏子の冷たい半眼で一気に、気温が下がっていた。

スーツと頬を流れる冷や汗を気にしないように、横島は言葉を切り出す。

「えーと、じゃ、練習がてら、『防』つて字を込めた方を使つていてくれ」

「えつ？ ええんか？ 今使こて？」

銀一が当然の疑問を口にする。

『防』には持続式簡易結界みたいな効果与えてあるから、使つとしたほうがいいんだよ。いつ襲われるかわかんねえのが除霊現場だかな」

横島のなんでもないような口調は経験に裏打ちされていた。

「そつちの『護』はもつと強力な防御結界だけど持続時間が短いんだ。『防』が効いてる間に『護』を併用したら『防』『護』の強化結界になる」

簡単ながら込められた文字と効果を説明していく。

「つていっても無尽蔵に効果がある訳じゃないから逃げる時間稼げるくらいに考えてくれよ」

最期はしつかり言い含めていた。

「で、最後の一個は『爆』、まあ、手榴弾みたいなもんだから、いざつて時に投げつけて使つてくれ」

「分かつたわ、んで使い方は？」

ポイツとビー球のようなもの三つ、銀一と夏子に投げ渡す。「何これ？」

受け取つて、手のひらに転がるビー球のようなものを『？』な表情で見ている。

良く見てみると玉の中には文字らしきものが浮かんでいる。

「あ、それ文珠つて言うんです」

「文珠？」

「込めた文字に応じて凝縮した霊力を解放して効果を発揮するんです」

首を傾げる夏子におキヌが楽しそうに説明します。

「横島さんの霊力が凝縮されたアイテムで、ゴーストスイーパーの中でも横島さんにしか作り出せない特別な物なんですよ」

エッヘンと自分のことの様におキヌは胸を張る。

「はああ、横島にしか、か」

さすがにコレには夏子も素直に驚嘆していた。

「そらすごいな」

銀一は親友の特異な能力を目の当たりにして思わず感心する。「ふつふつふ、そおか？ いや、それほどでもあるけどなあ」

と、あつさり胸張る横島忠夫。

「基本は、作動しろつて念じてくれたらいいんだ。後は文珠が勝手に文字通りに機能すつから」

「おいおい、俺の出とつたドラマでもこんな都合のええアイテム無かつたで」

「横島さんの文珠は三界一の柔軟性があるつて小竜姫様も言つてましたから」

「三界？」

「小竜姫様つて誰や？」

一般人二人からツツコミが入つた。当然この二人が知るはずも無い単語が二つあつた。

「あ」

ツツコミどころ満載の発言をした本人は冷や汗浮かべて固まつてしまった。

「人界、神界、魔界の三つを総称して三界つて言うんだよ」

横島がさつきのお返しとばかりに助け舟を出していた。

「ちなみに小竜姫様は知り合いのとても美しい竜神様で、ああ、小竜姫様く」

ただし、途中から妄想スイッチが入つたらしい。

「よ・こ・し・ま・さ・ん」

ぎうちく

青筋浮かべたおキヌが人差し指と親指でもつて思いつきり容赦無しで、耳をつねり上げていた。

「痛たたたたたつ、痛いっ、痛いよ。おキヌちゃんっ」
横島が悲鳴を上げている。

「しっかし、まあ、要は神様公認の非常識アイテムって意味がいな」

銀一は啞然として、つくづく旧友の恐ろしさを垣間見た気がしていた。

「まあ、とりあえず、あつちはお取り込み中みたいやし、コレのこととか？」

「まあ、やる事も無いので銀一が夏子に問いかける。

「せやな、使い方も聞いたしな。つたく横島も、ええ加減女心勉強したらええのにつ」

表面で同意を示しつつ、後半の毒舌は小声で呟いている。

隣の銀一は明後日の方向見ながら後半部分は聴かなかつたことにした。

旧友の自業自得を脇目に銀一と夏子は『防』の文珠に意思を加える。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

一見ブラブラと学生のグループが歩いているようにも見える。ともすれば、2組のカップルのダブルデートのようにも見える。

「見鬼君の反応がいまいちな」

傍に」

二枚目な顔で横島が指示を飛ばす。文珠『防』の効果があるとはいえ、攻撃を受けないに越したことは無い。

「はいっ、夏子さん、銀一さんこつちです」

おキヌは二人の一般人を庇うように後ろへ下がる。

「ああ、苦しい。うらめしいっ!!」

ザッ ダンッ

女は長い黒髪振り乱しながら、右手を振り上げ横島に向かってきた。

『結構早いな』

そう考える間に、女幽霊の右手は霊気をこめて振り下ろされる。

「くおっ」

横島の右手に青白い霊気の輝き、物質化した霊気を集束する霊波刀・ハンズオブグローリーを展開させていた。

ガッ! シイツ!!

飛び掛ってくる女の攻撃を集束した霊気手甲で受け止める。

「ギッ!」

ビクともしない横島に対して、衝撃で霊の方がたたらを踏んで後ずさる。

「おキヌちゃん、援護頼むっ」

ザッ、サッ

「歩いて探すしかなさそうですね」

人の気配がなくなつた校内。まだ日は高いのだが、物寂しい雰囲気は漂っていた。

「結構地味な作業やねんな」

少しばかり拍子抜けしたように夏子が呟いていた。

「まあ、相手が見つかからない間はしょうがねえよ」

横島も困つたように返していた。

だが、4人で歩いていると、程なくして異様な気配が周りを包み込む。

ユラッ

陽炎のような、それで居て暗さを伴つた気配が一般人である夏子と銀一にも感じられる。

「ねえ」

暗い呼び声だつた。路地の影からこの学校の制服姿の女が現れる。

明らかに生者と異なる気配に、周囲を人魂が揺らめいていた。

横島とおキヌが内心警戒を固めていた。周囲には十分な恐怖感をもたらしめる。

「こいつ、うちの学校の制服着とるけど、うちの生徒や無いで」

夏子の確認が飛ぶ。

「横っち?」

「銀ちゃん、夏子、ここは下がつてろ。おキヌちゃんは二人の

横島の呼びかけに、制服のスカートをなびかせおキヌが振り

返る。

「はいっ」

おキヌは取り出したネクロマンサーの笛を口に当て、一気に霊気と吐息を注ぎ込んだ。

ピュリリリリリリリリッ

『こんなことはもうやめましょう? 他の人を苦しめても、あなたは楽になんかならないんです。私がお手伝いますから、だから、成仏して』

おキヌの慈愛に満ちた思念を乗せた霊波の旋律が響き渡る。

『こ、これは、ホンマに癒される』

その音色は、近くに居る夏子と銀一の心さえも揺さぶる。

「ガアアアアアアアッ!!」

しかし、悪霊は頭を抱えて苦しむが、一向に浄霊される気配は無い。

バチッ バチバチッ

「これはっ」

笛から伝わる手ごたえにおキヌは戦慄する。

「横島さん、この人自分の意思で攻撃していません。強力な何かに操られていますっ!! この人は開放されたがっています」

「例の霊団つて奴の影響かつ! おキヌちゃん操作の依り代は分かるか?」

ギッ！ ガシッ！ ギンッ！！
攻撃を弾き、いなしつつの横島の呼びかけに、おキヌは精神を両目に集中させる。

キッ
神族・ヒヤクメから授かった心眼はすでに返してしまっていたが、かつての指導により覚醒したおキヌ自身の『心眼』が開眼する。

霊視ゴーグル無しで霊視が可能となった瞳は目の前にいる霊の在り様を再認識させる。

『これは、この人の霊体と着ている服の霊基が違う』

彼女そのものの霊体。そして、その意思を強制する異物が違う色を織り成すようにおキヌの目に映る。

「制服ですつ。その制服がその人の意思と行動を強制してしますつ」

おキヌの指摘が横島の背中に飛んだ。

「わかったつ。『制服』だな？」

ニヤッと横島が笑った。

ゾッ

「よ、横島さん？」

おキヌを含めた。他の三人は、霊よりもむしろ、横島の笑みに戦慄を覚えていた。

「制服でいいんだよな？」

「うううううう、頑張ったのに、頑張ったのにっ」

両側の頬に形の違う赤いモミジ貼り付けた横島が膝を抱えてえぐえぐ泣いていた。

「やかましわアホンダラっ!! このドスケベエロ魔人っ!!」

肩を怒らせた夏子が口から火でも吐き出さんばかりの勢いで怒鳴りつけていた。

「横島さんて、サイッター」

おキヌもこめかみに井桁張付けて口の端をヒクつかせていた。右手がジンジンと、赤くなっていたが、気にならないくらい不機嫌さが勝っていた。

女性陣二人による制裁は横島に多大なる打撃を与えていた。なんとというか主に精神面に、だろう。

「横つち、正直、俺もアレは無いやろ思うわ」

「しよーがねーだろ、俺の霊力の源は煩惱なんだからっ」

一体何をもつてしようがないというのかはよく分からないが、それが横島クオリティというものだろう。

「つたく、少しは成長しとったんかと思つたら、ホンマ全然変わつてへんっ」

「あの、昔からこうだったんですか？」

「せやで、体育の時は女子更衣室を覗き。修学旅行は男子引き連れて女風呂を覗き。日常生活ではスカートまくり三昧っ!!」

なんと言うか、さつきまでのカッコよさを台無しに吹っ飛ばす煩惱全開な笑い方で確認する横島の声に、周囲の三人は軽く震える。

「んっふっふっふっふっ、そうか、制服が支配しとるんやつたら、しようがないよなあ」

彼の両手の指がわきわき動いていた。もう非常に楽しげに蠢いていた。

異様な気配に女性の幽霊もこれでもかつて位にでっかい冷や汗を貼り付けている。

「制服切り裂いてポロリっついても不可抗力だよなあああああつ!!」

横島の霊力が底無しに増幅されていくのが分かってしまう辺り、なんだかともアレな感じだった。

敢えて詳細は語るまい。ただ、その光景を見ていた銀一は後にこう語った。

『まるで料理の鉄人が大根のかつら剥きでもしているかのようなっつ』

そして、戦いは終わったと思しき辺りで、パシインッというとても澄んだ平手打ちの音が2回ほど学校の敷地に響き渡つたそうである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ああああああ、そんな、そんな過去の過ちを今更掘り起こさんとつてくれええええ」

頭を抱えながら、横島がのた打ち回る。

ちなみにこれらの悪行には横島だけでなく銀一も参加していたことを追記しておく。

もつとも、後の『終わりの会』で吊し上げ食らうのは決まつて横島だけなのであつた。

「大丈夫ですよ、横島さん」

全てを聞いて、おキヌは優しく微笑んでいた。

「お、おキヌちゃん」

そんな隣の少女に思わず涙腺が緩みそうになる。

「今と全然変わつて無いだけですから♪ ホントに今更ですよ♪」

ザクウツ!!

おキヌの目は、見事に笑っていなかった。

「いやああああつ!! そんな汚物を見るような目はやめてええええつ!!」

横島の絶叫はむなしく虚空に溶け消えていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ややあつて、ようやく見鬼君にも反応が出てくるようになって

ていた。

ピコピコピコ

見鬼君の反応が持続的になっていく。

「こっちの方ですね」

おキヌの霊視も相まって進む方向は定まる。

カン カン カン

鉄板製の非常階段をゆつくりと上る。

ほぼ確定的な『敵』の存在に全員一様に表情を固め、手には汗を握る。

「ここ上ったら屋上で」

夏子の説明を受けるまでも無く見事に屋上、緊張感はこの上なく高まっていく。

「夏なんかーっ、夏なんかーっ!!」

そして、そこには空に向かって遠吠えする何かがあった。

ステーンつと横島とおキヌはスッ転ぶ。思いつきりそいつに見覚えがあった。

「というか、正直「コイツかあつ!!」という感じだった。

「誰だぎやつ?」

体長は3メートル強だろうか? 醜くぶよぶよな青黒い全身、

醜悪な顔と手足バタつかせて奴は振り返る。

「つて、なんやコイツ、悪霊で思ってた以上にブツ細工なやつぢやなあ」

ビシッと4人を指差しながら、継ぎ目の分からない首を仰

け反らせて大威張り。

「何年たつても変わらんやつぢやなく」

「あは、あははははは」

おキヌも隣で乾いた笑みを浮かべるしかない。

「つ? おみやー、学校の屋上にいやな思い出があるぢやな? ちきしよーとか思っただぢやな?」

何かに気づいて、奴はニタツと笑みを浮かべる。

「あのなあ、それは否定しねえけど、前におまえに会った時はど飢えてないし」

「んーにや、おでにわかるぞー、6、7年ほど前だ。おめーは

学校の屋上でその二人が」

ギクツ

横島は盛大に動揺していた。

「おみやーらも、だな? そいつになんか負い目とか持つてるぢやな? そんな気がするだぢや」

ニタリと醜悪に晒う。

夏子と銀一も身じろぎしていた。

ゾクツ

悪寒が全身を突き抜けていた。

ザワツ

寒気が屋上を支配する。有象無象の霊体が大量に集まり始め

見て早々、夏子は全く歯に衣着せない毒舌が炸裂した。

「おでは、おでわ、醜くて、かつこ悪くて悪かったなああああつ!! カップルなんてカップルなんてでえーきれーだバカヤロース!!」

横島とおキヌはゆつくり起き上がりながら、

「あー、もおなんかどうでもよくなってきたなあ」

「えーと、霊団ですか?」

おキヌは笛片手に困ったような顔で呆然とたたずんでいた。

確かにそいつはある意味では立派に霊団だった。何せモチない男や、痩せそこなった女の怨念、あらゆる夏に関する負の想念が蓄積したというアイデンティティの妖怪だ。

間違いないカップルを襲う、こいつなら、その持ち前のひがみ根性を発揮することで。

「つーか、誰だよ事前調査でこいつを『霊団』だって報告してきたのはっ!!」

「あー、おみやーはっ!!」

一直線に横島を指差していた。

「あの時のモチナイ男じゃにやーかつ!!」

「どやかましいーわああああつ!! つてか、てめーは何でこつちに現れてるんだよつ」

「ふつ、愚問だぎやつ!! 夏のカップルいるところにおでが現れるのは当然だぎやつ!!」

る。

醜悪なる妖怪・コンプレックスの周囲を悪霊達の気配が取り

巻き始めていた。

『コイツ、自力で悪霊を呼んだ? ヤバいつ!!』

ブンツ

改めて横島の右手に霊気の手甲・ハンズオブグロリーが具現化する。

「夏子、銀ちゃん、さつき渡した『護』の文珠使え! ここは俺らに任せろつ」

「わ、分かつたつ」

パキイイイインツ

銀一たちの持っていた文珠は光を放って発動する。込められた文字は『護』。先に発動していた『防』と相まって、二人を守る結界は多重強化される。

「おキヌちゃんつ」

「はいつ」

おキヌはネクロマンサーの笛を口に当て、息を吹き込む。

ピュリリリリリリリリリリリリ

霊力を伴った、澄んだ音色が屋上に響き渡る。

音色に触れた悪霊の多くが、安らいだ表情に変わり、ゆつくり天に帰っていく。

「よしつ」

期待通りの効果に横島も思わず歓声を上げる。
敵が霊だけではないため100%の効果は無いかもしれない
が取り巻く雑魚霊は一気に浄化されていった。

「ガアアアッ!!」

おキヌの浄霊を潜り抜けた数体の霊が、横島に踊りかかる。

「やかましいっ!」

ザッ! ザムッ!

しかし、横薙ぎのハンズオブグロリーによってあつさり両
断された。

その様子を見ていたコンプレックスは忌々しげに吐き捨てる。

「味なマネをするだぎゃ、だつたらこつちもこいつらを呼ぶだぎゃ」

全身に力を込め、先ほどよりも一際おぞましい寒気が周囲に
張り詰めた。

ザザザザッ

コンプレックスの周囲を新たな悪霊が現れる。

「っ!!」

既におキヌは笛を口に添えている。

「おキヌちゃんっ」

呼びかけるが早いか、既におキヌは動いていた。

ピュリリリリリリリリ

『お願いです。もう他の人を傷つけるのはやめてください。傷つ
けて救われる人はいないんです』

「どーゆー死に方したらそういうセリフが出てくるんじやあああ
ああああっ!!」

両手わななかせながら横島は絶叫していた。

『俺はっ、俺はっ、彼女が夏の海でナンパされて帰ってきて、悔
しくて遺書を書いたつたら、「やったあっ♪」とか言われたんだ
ぞ。満面の笑顔でっ!!』

「え、え〜と」

ちよつと、聞いてて切なくなった。

『私は、夏だからと思つてせつかくビキニを下ろしたのに、彼氏
から「あー、お前、無理すんな」つて生温かい目で気遣うよう
に言われたわっ!!』

「……」

誰も何もいわなかった。

というか、なんか申し訳なくて、何もいえなかった。

『海でおぼれた時、人工呼吸をためらわれてそのまま』

聞いててその場の全員が軽く泣きそうになる。

『俺なんかっ、海辺でナンパしたら20人連続でシカトされたんだ
ぞ、チキショー』

「だ、大丈夫ですっ。ここにいる横島さんは、ナンパ40人連続で
失敗したことがありますからっ!!」

「ちよつ、おキヌちゃああああんっ!!」

『ええっ!!』

バチッバチバチッ!!

おキヌの切なる想いの込められた笛の音は、強烈な霊力のせ
めぎあいによって弾かれた。

ギッ! ドサアッ

「きゃっ」

弾かれたおキヌが1メートルばかり吹き飛ばされて尻餅をつい
ていた。

「おキヌちゃんっ」

横島が背中中で庇う様な位置に動き、その隙におキヌも起き上
がる。

「どんな奴なんだ?」

「とても、強い意志です。凄く強力な恨みの念が」

青ざめた顔で答える。

『おキヌちゃんの説得も効かないくらい強い意志力つてことか』

「げっげっげっげ、こいつらはおでの心強い仲間だぎゃ」

コンプレックスを悪霊たちが取り巻いている。

そして、彼らは一斉に叫んだ。

「「夏なんかきらいだ、ばつきやろーっ!!」」

ズガシヤアッ!!

横島とおキヌは盛大にひっくり返っていた。

どうやらコンプレックスと悪霊たちは固い血の結束（死んで
るけど）で固められているらしかった。

むしろ、悪霊たちが横島に生温かい視線を送ってきていた。

「あ、横島さんっ、今ちよつと説得に手ごたえがっ」

グツとこぶしを握つて、呼びかける天然少女の声が横島には
痛い。

「いらんっ、そんな生温かいお返しの来る説得は断じていらん
っ!!」

「おみゃー」

コンプレックスさえも痛ましい視線で横島を眺めている。

「ちきしよー、そんな目で俺を見るなあああ、つて夏子と銀ちゃ
んまでっ」

振り返れば、夏子と銀一もハンカチで目頭をぬぐっていた。

「とにかくおでと共にカップル滅ぼすだぎゃっ!!」

『おおっ!!』

悪霊たちは一斉にコンプレックスに向かって集合していく、
ずしゅうううううううっ!!

悪霊たちは次々とコンプレックスに吸収されていき、コンプ
レックスの黒い気配がどんどん密度を増していった。

憎悪・嫉妬の混じった圧力が4人の少年少女たちを押しつぶ
そうとしていた。

「げっげっげっげ、夏の後悔と負い目と劣等感を思い知るがいい
だぎゃっ!!」

ヌラリとした眼光が怪しく輝き、瘴気に似た気配を吹き上げ

る。
「こいつつ、陰の気をすすするだけじゃなくて、集中して増幅してんのか？」

陰の気、コンプレックスがいうそれが何を指し、作用するのか、詳しく分からないが、はつきりしている事がある。有象無象の霊を取り込み力を増すこの特性だ。

「なるほど、『霊団』か」

この圧力は周囲の霊の力を吸収して、己の増強と回復をする存在を意味する。

事前調査があながち間違いでなかったことをようやく確信した。

しかも、核が霊ではなく妖怪だ。これは相当に始末が悪い。

「こりや、腰すえていかないよ、本気でやられるな」

右手にハンズオブグロリーを強く維持して、左手にはサイキックソーサーも出現させる。

「げっげっげっ♪」

薄笑いと共にコンプレックスが接近する。

「早っ、しかもキモっ!!」

思わずそう叫ばされるほどに巨体を感じさせない軽い足取り、横島との間合いを詰めてくる。

すさまじい勢いで鋭いカギ爪が襲い掛かる。

「くおっ!!」

「よ、横島っ」

抱きかかえられたままの夏子が心配げに見上げている。

爪で抉られた様なキズは、一見それほど深くはない。

だが、横島が傷口から寒気のような感覚がある。

「っ!? 爪が霊刀みたくなくなってやがる。斬られた所から霊力が持っていかれたっ?」

「げっげっげっ♪ おでだつて成長してるんだぎや」

コンプレックスは喉の奥を鳴らしガマ蛙のような含み笑いを浮かべる。

「それにしても、おみゃーの霊力は桁違いだぎや、一番危険なのはおみゃーだぎや、せつかくもらつたモンだ。おみゃーの後悔や劣等感を根こそぎ使わしてもらうぎや」

ゴォツ

生温い風が吹き抜ける。

「やばいつ、何かくるっ」

世界が暗転する。

世界が変わる。

風景はここではない屋上が広がる。さつきまでと違うその景色へと変わっていく。

「な、何やっ!?!」

銀一の驚愕の音がむなしく響く。

「こいつ、もしかしてっ」

ガキイツ!

カギ爪とサイキックソーサーが接触して、鋭く火花を散らす。ガツ ズサアツ!

攻撃をかううじて受け止めるが、銀一たちの結界近くまで吹っ飛ばされる。

「横島っ!」

叫んだ夏子は思わず結界から飛び出していた。

ズズツ

這いずる様にコンプレックスが夏子を見下ろしていた。

「あ」

青ざめた夏子がコンプレックスの巨体を見上げる。

奴はニタリツと晒った。

「げっげっげっ♪」

無慈悲にカギ爪は振り下ろされる。

そこには、恐怖で身動きの取れなくなった夏子。

「危ねええええええっ!!」

横島が叫ぶ。

ザシュウツ!!

神速の動きでコンプレックスの攻撃から夏子を抱きかかえて庇っていた。

「くおっ」

庇った瞬間、背中の一部が切り裂かれていた。

夏子は別の意味で驚きの声を上げている。

「うちの小学校のっ」

階段を横島が昇ってくる。今の横島では無い。バンダナも巻いていない。小学校高学年と思しき、その姿。片手にミニ四駆のピットケースをぶら下げている。

「銀ちゃーん……!! 引越し明日やる? せんべつに俺のペガサス……っ?」

屋上の扉の向こう側、横島の視線の先には、金網の前に立つ帽子を目深にかぶったジャケット姿の親友と、長い栗色の髪が風に揺れる少女。

『銀ちゃん……夏子』

少年・横島の声にならない心の声が聞こえる。

この場に紛れている17歳の銀一と夏子が冷や汗を流す。この場面は、覚えがある。

横島は何もいえなかった。17歳の横島も11歳の横島も何も言えない。

少年の心がチクリと痛んだ。夏子は、性格もきつくていつも横島を目の敵にしていたが、それは気の置けない仲のよさの裏返しでもあつた事を少年はよく知っていた。

そして、その少女を見る気持ちに甘酸っぱいものを感じていた。

目の前の光景に、親友と初恋の少女が並び立つ光景に何も言

えなくなる。

気づけば、横島は扉の影に隠れていた。

「ま、ええわ……銀ちゃんカッコええもんな」

寂しげに、そして、自分に言い聞かせるような、切ない表情で屋上に背を向けた。

ザ、ザザザ

風景が元の高校の屋上に戻る。

「くっ!! てっ、てめえっ」

ハッと気づいた横島がぐらつく頭を抑えながら怒声を上げる。

『やべえっ、完全に集中力を乱されてる』

右手のハンズオブグロリーリーの集束が弱まっているのがそれを明確に意味している。

「げっげっげっ、おみゃーの記憶を基にした心象風景映像だぎや、よくできてるだぎや?」

神経を逆なでするような含み笑い。更に複数の悪霊を呼び出している。

「トドメをくれてやるだぎや」

「よ、横島」

夏子が呆然とした瞳で横島を見上げていた。

何かを悟っていた。少女は今まであの場面を見られていたとは思わなかった。

しかも、あんな形で見られていたとは、思いもしなかった。

何故、銀一が引越した後、横島が少女と距離を置くようになったのか?

幼い頃には気づいていなかった謎が、横島の劣等感の具現という形で知る事になってしまった。

全ては誤解だったと、今になってようやく悟ったのだ。

「さあ、かかるだぎヤッ!!」

コンプレックスが攻撃の掛け声を上げる。

「キシヤアアアアアッ!!」

悪霊たちが氣勢を上げて、一斉に横島と夏子に踊りかかった。

「下がってろ、夏子っ!!」

「あ、横島」

「早くっ!!」

「夏子、こっちやつ!!」

横島の必死の呼びかけに銀一が動いた。銀一が夏子の腕をつかみ、結果まで後退する。

「くそっ、こいつらっ!!」

思わず毒づく、集中を乱しながらも横島は良く戦っているというべきだろう。

格段に威力の下がったハンズオブグロリーリーで、悪霊どもの攻撃をかわし、受け止め、いなしきる。

隙を見て攻撃を加えても決定的な攻撃力は失われていた。増える悪霊を退治できない。

「ちきしよっ、こーなつたら文珠で一氣にっ」

手のひらに靈力を集中させる。

ボシユウツ

「えっ」

靈気の煙だけで、文珠は出てこなかった。ストックしていたので、すぐ出せたはずだ。

まるでアシユタロスに靈波をジャミングされていた時のような文珠の消失だった。

「げっげっげっ、おでの攻撃が良く効いてるみたいだぎやつ♪」

暗い愉悦に満足の顔を浮かべる醜悪な妖怪。

横島は額に冷や汗を張付けて集束不十分なハンズオブグロリーを構えなおす。

「くそ、さっきの精神攻撃の影響かよ」

忌々しげに呟くしかない。間違いなくこのままでは追い込まれるだけだ。

ピュリリリリリリリリリリリリリリリ

『お願いです。苦しい気持ちは分かります。でも、誰かを傷ついても楽になんかならないんです。生まれ変わって新しく』

響き渡る笛の音に悪霊たちの動きが鈍る。必死のおキヌが笛で援護していた。

「耳障りな音だぎや」

「えっ」

コンプレックスの窪んだ瞳が薄暗く輝く。

「おみゃー、思い出しただぎや。あのプールの時おでが操ったことのある幽霊だぎやな?」

ゾクリッ

おキヌの背筋に冷たいものが流れていた。

「ちよーど、いいだぎや、あの時と今の笛で分かったこと使って、特別おみゃーに面白いものを見せてやるだぎや」

ゴッ

漆黒の闇に包まれる。

『あの人だ。あの人がいい』

ゾクッ

声に聞き覚えがある。しかし、それはいつもの明るく優しい調子ではなく、ひどく澱んだ様な暗い声。

「あ、ああああ」

おキヌは戦慄する。この言葉に、覚えがあったからだ。そう、これは紛れも無く自分が呟いた言葉だった。

唇は紫色になり、顔は蒼白、小刻みに肩が震え始めていた。

風景は雪山、いつもの上下デニム姿の横島に、呟いた声の主が襲い掛かる。

『えいっ!!』

雪に包まれた山の中、一抱えある岩で横島を殴りつけた。

『お願いです。私のために死んでくださいっ!!』



叫びながら視界には血まみれの横島を殴りつける細い腕。それは巫女服を纏った。

カラーンッ

「いやああああああああああつ!!」

思わず笛を取り落とし、両耳を押さえて、その場に崩れ落ちた。

「げっげっげっげ、何が『気持ちはこちらから』だぎや。この偽善者、自分が助かろうとして人一人殺そうとした悪霊娘が」

コンプレックスの押搦の声におキヌは全身を震わせてうずくまっていた。瞳からポロポロと涙が溢れて止まらない。

「ふっざけんなあつ!!」

ギシイイイイイッ!!

不安定だった横島のハンズオブグローリーが弾けたように集束を増し、取り付こうとしていた悪霊教体を一気に切り裂いた。

ヴヅヴヅヴヅヴヅヴヅヴヅ

先ほどまでの不調をもものもしない。霊波刀が大気を震わすほどに唸りを上げていた。

それは横島がかの妖怪に対して、いかほどの怒りを持っているかを現している。

「てめえなんか、三百年間一人ぼっちで頑張ってきたおキヌちゃん、あんが気持ち分かってたまるかっ!!」

横島が心の底から叫んだ。

「三百年だぞつ。たった一人ですつとずつと山奥に居て、気が狂いそうになったつておかしくねえんだつ!!」

純然な怒りが横島の奥底から湧き上がってくる。

「てめえみたいな夏の遊び場で勝手に拗ねてる奴が、おキヌちゃんをとやかく言う筋合いなんかねえつ!!」

「横島、さん」

ポロポロに泣き崩れていたおキヌは、少しずつ、けれど、確実に気持ちを落ち着けていた。

「私、私」

「おキヌちゃん、俺はおキヌちゃんに出会えて本当に良かったつて思ってるつ」

振り向く余裕はまだない。けれど、まっすぐな声がおキヌに届く。

「え?」

トクンッ

少女の鼓動が高鳴った。

「あの日、おキヌちゃんと出会えたから、今の俺がいる」

それは少年の心からの声だ。

「いつもおキヌちゃんが支えてくれて時々叱咤してくれたから、俺はまっすぐ立ってられたんだ。あいつみたいな歪んだ奴にならなくてすんでんだつ」

「横島さん」

さつきと違う意味の涙が心の奥底からこみ上げてくるのを感じていた。

「GS試験のときも、美神さんがオカルトGメンに引き抜かれそうになった時も、ワルキューレに戦力外だつて言われたときも、ルシオラが死んだときも」

最後の言葉小さかったけれど、それは間違いなく横島の真実の声だった。

「いつもおキヌちゃんが励ましてくれたから、時々叱ってくれたから俺は」

ようやく振り返っておキヌに目で語りかける。

「ここで踏ん張れるんだ」

まっすぐな視線だった。

ドキンッ

少女は自分の胸から溢れてくる気持ちを強く自覚する。

「だから、これからも俺を支えてくれよっ、なっ」

「は、はっ」

横島の言葉に押し上げられるように、おキヌは笛を手に立ち上がっていた。

その表情は完全に立ち直っている。いや、むしろ、熱っぽい瞳で横島を見ているかもしれない。

「ちっ、持ち直したぎゃか、仕方ないぎゃ。こうなったら実力行使でやってやるぎゃ」

「核になるモンがあれば、この通りだぎゃっ!!」

叫ぶと同時にコンプレックスは更に悪霊を召喚していく。

蛍という核が横島から奪い取った霊力を基にしていることは明白だ。

「さあ、現れるだぎゃっ」

呼びかけて複数の悪霊を、蛍に集中させる。

カッ!!

一瞬ひときわまばゆく輝く。

蛍だった霊力の核は、人の形を成す。美しい女性の姿へと姿を現していく。

「くっ」

「おみゃーにや、こいつは攻撃できねえぎゃっ、なぜならこいつはおみゃーの中にあつた本人の一部だぎゃ」

黒髪のショートボブが揺れていた。額には金属を思わせるバイザー。髪の毛の間からは触覚がある。

全身を包むその服は一見コスプレのようにも見えるが黒を基調とした彼女専用の戦闘服だ。

「ルシオラさん」

おキヌは呆然としてその名を呟いていた。

それは、かつて共に過ごしていたことさえある。

「くそっ」

横島は苦しげな表情で見ることしか出来ない。数メートル先

「おキヌちゃんにしてくれやがった分を万倍にしたるからな」
いつに無く怒りを露にしたままの横島が腰だめに構える。

「おみゃーの霊力を、有効活用してやるぎゃ」

コンプレックスが手を天にかざす。その手に稲光のような閃光が灯る。

ゴアッ

再び風景が変わる。

高い、はるかな高層の世界が現れていた。

町は夜闇に包まれ、町は暴れまわる魑魅魍魎によって混乱の極みに達していた。

彼方には光り輝く謎の建造物がある。無数の光の糸は放射状に吐き出され頭をたれる。

かつてのアシュタロスとまみえた者は知っている。はるか遠くに見える宇宙演算処理装置（コスモプロセッサ）だった。

ならばこの場所は、東京タワー第二展望台の屋根の上である。

「てめっ!!」

横島がギリツツと奥歯をかみ締める。

横島の人生最大の後悔が渦巻く場所が具現化されていた。

「げっげっげっげっ、これが、おでの実力行使だぎゃっ!!」

更にコンプレックスの目の前に光が集束した。

「なっ!!」

目の前に薄く輝く蛍が現れる。

に現れた。魔族の少女。かつての恋人の姿を。



第八試合(メインイベント)
○ジャスティス・童 ミラージュ コンプレックス●
マイティ・氷室 スープレックス
サンダー・夏子 ホールド
(28分48秒)

ルシオラがクルリと振り返る。

その瞳には涙が溢れそうになっている。

「ヨコシマっ!!」

輝かんばかりの笑顔で横島に飛びついていった。

「会えたっ、ヨコシマに会えたっ」

しゃくりあげながら、ルシオラは横島の胸に顔をうずめる。

その様子を、おキヌと夏子は少し複雑そうに見ているしかでささない。

「ルシオラ、本当に、本当にお前なのか？」

半ば呆然としたままルシオラを抱きとめていた。

目頭が熱くなる。もう逢えるはずがないと心のどこかで分かっていた。

彼女は瞳に涙を溜めたまま、ゆっくりと左右に首を振る。

「残念だけど違うわ」

うつむいて、悲しげな声だった。

「私はお前の霊基に残ったルシオラの霊基を核にして、あの妖怪が作り出したまがい物の残渣に過ぎないの」

しかし、その憂いを含んだ表情は、横島の記憶にあるルシオラそのものだった。

「ルシオラ」

「その証拠に、ほら」

横島に自分の手を見せる。その腕は徐々にブレ始めていた。

認めざるを得ない。

無理に作られたいびつな存在である事を、認めるしかない。

「だから、魔物の亡霊のそのまた亡霊かしら、それは自分でも分かっている、でも」

再びその頬を涙が伝っていた。そして、その雫が弾ける。

「どんな形でもおまえに会えて嬉しいのっ」

『そうだよ』

「やっぱりお前はルシオラだよ」

横島は優しく微笑んでいた。

「ヨコシマっ」

「ごめんな、俺のために」

何の事を指していたのだろう。ただ、横島の口を突いて出たのは謝罪だった。

ルシオラは小さく首を左右に振った。

「私は十分満足していたわ」

ルシオラは微笑む。

「もう、時間、無さそう」

「そうか、じゃあ」

「ええ、生まれ変わった時かしら」

「そうだな」

「ヨコシマ、私ね」

パシィッ

何かはじける音が聞こえた。

「あ」

横島の体がまっすぐ崩れ、その身体を蛍の少女が抱きとめる。ルシオラの右手が横島の後頭部に触れていた。

「えっ？」

横島を含めて、周囲は一瞬何が起こったかが分からない。

ただ、間違いないのは、横島が昏倒したのはルシオラの仕業だということだけだ。

「あ、あんた、いきなりなにすんねんっ!!」

金縛りから解けて、思わず夏子が詰め寄りそうになる。

「何って？ 私はヨコシマを連れて行きたいだけよ」

横島を抱きとめたまま、ルシオラは答えていた。

「せやかて、もうすぐ消えるて」

「そうよ、だから『連れて行く』の」

淡々と答える。最後は少し狂気の色に微笑んで見せた。

ゾクッ

夏子の背筋に冷たいものが走った。

「こ、このアマ」

「文句があるみたいね。どうするって言うのかしら？」

ギリッ

『さつき、横島がくれた文珠「爆」が残ってる。コレ使ったら何とかならんか?』

自信たっぷりの笑顔でおキヌが答える。

「ヨコシマが騙されたとかは」

「ルシオラさん!」

おキヌには珍しい怒ったように荒い声だった。

「横島さんがルシオラさんのことを間違えるわけありませんよ!」

実際、横島がルシオラを誤認することはないのだ。

この場にいる人間は知らないが、横島はルシオラと基本霊気が同じ妹のベスパの変化でさえも、一見しただけで看破した事がある。

ましてや、今回はコンプレックスが不純物を使って生み出した存在だ。

根本的にルシオラでなければ、横島がルシオラと認めるわけがないのだ。

だが、ベスパの一件を知らないおキヌが信じたのは何故か?

しばし、ルシオラとおキヌは見合っつて、ルシオラは天を仰ぐ。

「はあつ、もお、おキヌちゃんには敵わないわね」

言いながら肩で大きくため息をついていた。

「横島さんとは長い付き合いですから」

おキヌも小首をかしげて相手を崩す。

かつて幽霊時代、横島は不良少女に憑依していたおキヌをあつさり見抜いてしまった。

必死に考える。

その間にも夏子とルシオラ、二人の間に緊張感が高まっていく。

「ルシオラさん、お芝居はそのくらいにしたらどうですか?」

おキヌは困ったような顔であつさりと言った。

「「っ!」」

残る3人が驚愕を露にする。

「どういう意味かしら?」

ルシオラが意味を凶りかねたように問いかける。

「ルシオラさんが横島さんを傷つけるわけがありません。目的は分かりませんが、わざと悪役の振りして何か確認してる。そういう事ですよね?」

「お、おキヌちゃん、その女のことまだっ」

夏子は動転したままの声で思わずささぎる。

「大丈夫ですよ。だって、彼女はルシオラさんですから横島さんに絶対に危害を加えっこありません」

余裕の笑顔で至極あつさりと返す。

「いや、さつき、自分で言うてたで『まがい物』てっ」

「でも、横島さんはルシオラさんって認めました」

「私がさつきの妖怪とか悪霊の影響受けてるとか考えないのかしら?」

「だったら、横島さんが気づいています」

何の根拠もない。ただ魂だけが同一の存在を見抜いたのだ。

『あの横島さんが、ルシオラさんを間違うはずありません』

自分が大切に想っている横島という少年を信じただけのことだった。

「結局、どういうことだったんですか?」

「んー、結局、私は横島と結ばれることは無いでしょ。ホントに残念だけど」

苦笑しながらおキヌを見つめる。

『ルシオラ』本人として横島の恋人になることは叶わない。おそらくは横島の子供として転生することになる。

「でも、それならそれで、ヨコシマの隣にいる資格のある人を、その、ね」

「試したかったって事ですな?」

率直な指摘に、素直に頭を垂れる。

「ごめんなさい。本当は私に立ち向かってきてくれたら、それで十分だったわ」

ルシオラは苦笑する。

「でも、おキヌちゃんには完璧に負けちゃったわね。心底ヨコシマを信じてるんですもの、妄信じゃなくて、裏打ちされた自信で」

少し悔しそうだった。

「あんた、そないなことのために」

夏子は呆れたように表情を引きつらせていた。

「ごめんなさい。でも、私にとつてヨコシマは全てだったの。だから、ヨコシマのためなら何も惜しくないわ」

そして、少しだけ躊躇いがちに続けていく。

「それと夏子さんに対して、ちよつと悔しかつたから」

「く、悔しいて?」

予想外な言葉をぶつけられて夏子も思わず狼狽する。

「私の初恋はヨコシマだったけど、横島にとつての初恋は、夏子さんだったから」

ボツ

夏子の顔が一瞬にして真っ赤に染まる。

「な、ななな、いきなり何言うてんのっ!?!」

「だって、今の私つてあの妖怪が奪った霊力受け継いでるのよ。だから、横島の思い出もちよつとだけ、ね」

ペロツと小さく舌を出す。

「屋上のあのシーンだけどヨコシマの初恋（失恋）つてページ名つけてたわよ。あのクサレ妖怪」

後ろのほうに転がっているでつかい生ゴミを指差しながら剣呑な笑みを浮かべていた。

ふつと表情を緩めて、

「その様子だと両思いだったみたい、ね。今更だけど、妬げちゃうわ」

結構切実な表情だった。

誰の事を指しているかは想像がついたので、おキヌも流石にコメントに困って苦笑いするしかなかった。

「なあ、ルシオラさん。横っち、いつになったら目え覚ますんや?」

伺うように銀一が問いかけてくる。

「あ、そうね。ヨコシマを気付けするわ」

間もなく陽は沈み始めようとしていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ん、ああ、え?」

横島は目を覚ますと半身を起こして慌てて周囲を見回す。

「え、あれ? 夏子?」

真っ先に見つけたのは夏子だった。

「あれ?」

真つ赤な顔で心配そうに見下ろす夏子に、面食らっていた。

「ようやく起きたんかアホ」

ぶつきらぼうな、照れ隠しの言葉だ。

「い、いきなりご挨拶だな」

「よ、ええ夢は見られたか?」

銀一がニヤニヤ笑いながら見下ろしている。

「うっ」

「夏子、ホンマのこと言うたつたらええんちゃうか? 横っち絶対誤解しとるで、今回の同窓会開催かて本音は横っちに会う口実なんやろ?」

横で銀一も苦笑しながら、促していた。

「う、うっさいわっ。つたく、全部このニブチンが悪いねんっ」

気絶したままの横島のおデコを手のひらでパシッと叩いて、夏子は頬をブワツと膨らませる。

「まったく、うちが好きやったんは銀一やのうて、お前やねんで横島つ、あんなトコで変な誤解すんやないわっ」

顔を真っ赤に染めたまま、一気に搾り出すように言う。

「起きるときに言うたれよ」

そんな夏子に、銀一が名状しがたい表情でツツこんでいた。

「そ、そんなん恥ずかしいて、よお言わんわっ」

真つ赤な顔で言い返す夏子の瞳は少しばかり潤んでいた。

初々しいというかなんと言うか、普段の勝気さが脆く崩れてしまっている。

「それにしても、どうして私たち二人なんですか?」

「ん? 横島にとつては可能性が高そうだったもの」

おキヌの問いかけにルシオラが苦笑する。

「1000年待つてた人が優先権を主張してるけど、なんかヨコシマの幸せを考えたら、二人にがんばって欲しいし」

「どーゆーイヤミだよ」

そして、隣を見る。

「ルシオラ」

傍には、かつての恋人。彼女は腰を下ろして肩をおキヌに支えられていた。

「ヨコシマ、見て」

言いながら空を見上げる。

「あ」

朱に染まる空、思い出を司る赤い世界だ。

ほんのひと時の幻想的な風景。埋め尽くすセミの声を忘れそれに目を奪われる。

「夕焼け、だな」

「綺麗ね」

「そうだな」

「ヨコシマ、あまり気に病まないでね」

「何をだよ?」

「そのうち私はおまえの元に生まれ変わるわ。だって私の帰る場所はお前のところだもの。だから、今はそろそろいくね」

「ああ」

ルシオラの別れの言葉に横島は短く返す。

「ただそれまでは、ときどきでいいから思い出してね。私みたいな女の子がいたつてこと」

涙をかすかに浮かべたまま微笑んだ。

「忘れるわけがねえだろ、お前のこと」

言いながら名状しがたい表情の横島を見て、ルシオラはただ微笑んだ。

「おキヌちゃん、お願い。私の身体を繕ってる人たちを導いてあげて、私自身も」

「はい」

ルシオラの言葉に従って、おキヌはネクロマンサーの笛に唇を添える。

ピュリリリリリリリリリリリリリリリ

おキヌの想いが、霊気が、笛に命を吹き込み、ひと際澄んだ音を奏で出した。

『帰りましょう悲しみの無い世界へ、そして、待ちましょう望まれた姿で生まれ変わるその日まで一緒に』

遠く風に乗って、この場に集まった霊たちの魂を癒していく。

ピュリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ
リリ

込められた想いに触れて、ルシオラは思わず涙ぐみそうになる。

「おキヌちゃん、夏子さん、ヨコシマのことお願い。ヨコシマ、またね」

瞳を閉じて、ルシオラの全身が光を放つ。その姿は徐々に薄

で♪」

「確かになあ、こりや夏子に感謝だな」

思わず横島も同意していた。

その声を聞いた夏子の後姿がビクツと震える。

「ん？ どうした？」

「な、なんでもあらへんっ」

なんと言うこともなく、意味不明に慌てた声が背中越しに返っていた。

耳が赤いことに横島は気づかなかったようだ。

「ホンマや、こら、ええ場所や。あの塔もよお見えよる」

銀一も納得の太鼓判を押す。

「こつから歩いて5分から10分つてとこや、間に変な建物ないし、よお見えるで」

夏子が振り返ってニパツと笑う。

「ホンマ毎年ここを立ち入り禁止するんやからもつたない話やわ」

「立ち入り禁止？ なんだそりや」

横島が首をひねる。

「言葉どおりや。昼過ぎからもう、校内に人が入れんようになるねん。混乱招く言うてな」

いささか慥然とした表情で夏子は語る。

「全くアホやで、この辺府立高校が3つもあんねんで、こんな感

くぼやけて、散り散りの光となって空に帰っていく。

コンプレックスの身体からも、多くの光が立ち上って、壮大な花火のように、解放された魂たちが天に昇っていく。

「あつ」

不意に横島が自分の体にしがみつくと存在に気づいた。

薄く輝く蛍が、横島の身体にしがみついて、吸い込まれていた。

「そつか、一緒に待とうな」

労わるような小さな微笑だった。

「終わったんですね」

おキヌが笛から唇を離し、呟く。

「ああ、終わったな」

横島の吐息のような言葉が今回の除霊の完了を示していた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ここが会場やで」

ようやく安心できたのか、夏子はいつものペースを取り戻していた。

「どない？ ええ場所やろ？」

振り返って夏子は自慢げに両手を広げる。

「こないな特等席で12万発の花火見られるなんてそうそう無い

拳を握って夏子が持論を展開する。

「俺が美神さん思い出したんは気のせいかな？」

横島と銀一が思いつきり引いていた。

「なあ、横つち」

「なんだ銀ちゃん？」

「俺が美神さん思い出したんは気のせいかな？」

「奇遇だな、俺もだよ」

男二人が微妙なコメントを述べ合ってる風景をおキヌは苦笑して眺めていた。

「さて、そろそろ集合時間も迫ってきてるし、生徒会室からの荷

運び手伝つてやつ」

夏子はまたニパツと笑顔浮かべた。

「なんだか横島も銀一もその笑顔に浮かされそうな気分になつてしまっていた。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そして、同窓会という名の宴は始まる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ドーンツ ドーンツ ドーンツ
次々と打ちあがる花火たち、他の花火大会とは連発振りの桁が違う。

次々と打ちあがり、空を光の花で埋め尽くしていく。

「横島、楽しんでるか?」

すぐ横に夏子がやってきていた。

「え? あ、ああ」

横島はなんとなく違和感を感じている。

「これ、持って来たつたで、あ、ゆっくり飲みや。それがなくなりそうやからつてあんたのためにとつて来たつたわけや無いからなつ、ちよつと取りすぎただけやからな」

横島は何も言つて無いのに誤魔化すように真つ赤になって走り去つていった。

なんと言えればいいのだろうか? 妙に夏子の笑顔が柔らかいというか、なんと言うか可愛らしいというか。

いつもなら憎まれ口の一つも叩くのに、先ほど横島が目覚ましてからというものほとんど毒舌は発揮されていない。

たまにイヤミっぽいことも言われるが、昼間のような棘が無い。むしろ、恥じらいらしいものが多分に感じられる。

「何があつたんだ?」

銀一にも聞いてみたが答えてくれなかった。

少しもじもじしながら、おキヌは呼びかける。

「ん?」

「私も、横島さんに出会えてよかつたです」

頬を染めて、ささやくように言つていた。

「え?」

「あの、今日の横島さんの言葉が凄く嬉しかつたんです」

耳まで真つ赤にしていた。

「え? あ、ああ」

つられて頬が上気していくのが横島にも分かる。

「あ、ナイアガラ」

不意に誰かの声が聞こえたクライマックスを示す、流れ落ちるような光の乱舞。

周囲が朱に染まる。あたかも夕陽の中の情景の如く美しく染まる。

「あつ」

横島の脳裏にフラッシュバックする。

『昼と夜の一瞬の間……少しの間しか見れないからよけい綺麗なのね』

花火のように鮮烈に輝き、美しい思い出を残したまま逝つた蛍の化身の少女。

今見ているそれは夕陽ではなかつたけれど、彼女を鮮烈に思い出した。

『聞きたいんやつたら夏子から聞け、俺は知らん』

その一点張りだつた。

現在、銀一は向こうの方で旧友たち(女子)に囲まれて大変なことになっている。

さすがにかつてのモチキングで現役アイドルとなるとフェロモンも強力だろう。

屋上では思い思いの場所で皆が花火を楽しんでいた。

もつとも始まる前に横島がバイト先の女の子を連れてきているとなつて一時騒然となつていた。

予想通りというかなんと言うか、おキヌを見て「ずっと前から愛してましたあつ!」とのたまう勇者がいたようだ。

しかし、他の女子によつて一斗缶でツツコミを喰らい気持ちいい音を響かせ撃ち落とされたのは愉快な物語である。

そんなことを思い返しつつも夏子がくれたジンジャーエールで喉を潤す。

甘い味が口いっぱい広がつていった。

「綺麗ですね」

おキヌから感嘆の声が漏れる。いつの間にか傍にいたらしい。

「ああ、そうだな」

柄にも無く横島も花火に魅入られるように夜空を見上げていた。

「あの、横島さん」

「ルシ……」

思わずこぼれそうになつた名前を飲み込む。

少しか、強い忍耐を使つてだつた。

トサツ

「え?」

不意に横島の肩に誰かがもたれかかつた。

「無理は良くないですよ?」

あくまで花火を見ながら、おキヌはささやいた。

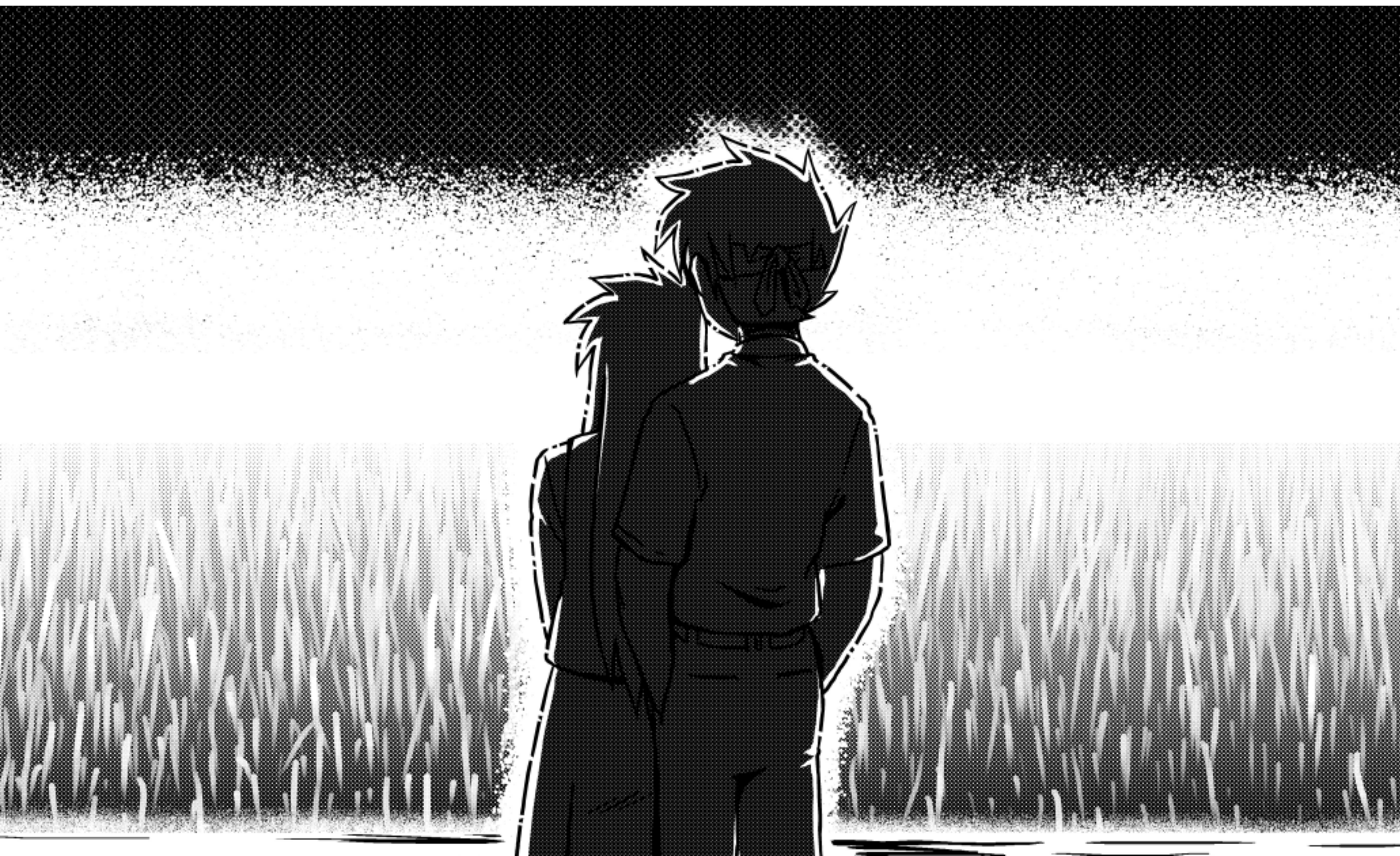
『お見通しか、敵わねえな、おキヌちゃんには』

「あ、いや、無理はしてないよ。ただ、ちよつとだけ思い出しただけでさ」

「それでいいと思いますよ。きつと喜んでくれますから」

「ありがとうな、おキヌちゃん」

花火の夜は更けていく、少年や少女の心に様々な思い出を残して



ピリリリリリリリリリ

「ほな、これでお別れやね」

「だな」

結局、横島に対する夏子の態度が変わった理由については良
く分からないままだった。

4人が初めて顔を合わせた新幹線の駅ホーム。

今は別れの場所になりつつある。

「横島」

夏子が呼び止める。

「ん？」

「ちよつと目え、瞑つてや」

「な、何だよ一体」

「ええから、はよしつ」

「あ、ああ」

言われたとおりに目を瞑る。

チュツ

頬に柔らかい感触が触れていた。

「え？」

「横島、うちが優しなった理由は、今度会うたら教えたるさかい。

また大阪来るんやで」

恥ずかしそうな上目遣いで夏子は言葉を搾り出していった。

「え？ え？」

ことを追記しておく。

「もおつ、夏子さんずるいです」

おキヌが少し拗ねたように頬を膨らませていた。

「ごめん、ごめんで、やけど、これからしばらく会われへんねん

から、この位はハンデとして許してえな」

「もお、今日だけですからね」

責める瞳はそれほど刺々しくは無くて、お互いふつと相好を

崩す。

「それじゃ、また」

笑顔で手を振る。

「うん、またな」

背を向けるおキヌ、夏子は一旦その背を見送りかけた。

「あ、そや、おキヌちゃん」

「はい？」

入り口で振り返る。

「横島のこと、あそこまでよう信じられたな？」

「はい、横島さんは絶対期待を裏切らない人ですから」

屈託の無い笑顔で答える。

「はあつ、もお敵わんわ」

「何がですか？」

おキヌが小首をかしげる。

「横島もやけど、あんたも相当ニブチンやな」



「さ、横っち、荷物持って席確保するで〜」

銀一はわけの分からない状態の横島の腕を取って車両の奥へ
と引きずって行った。こめかみに青筋が浮かんでいたのは気の
せいだろう多分。

そもそもグリーン車なので席を確保する必要など元から無い

呆れたように首をひねって、軽くため息ついた。

「今回のトコはうちの負けやで、あんた、あいつん事よう分かっ
てるわ。けど、次会う時はうちかて負けへん。浪速の女は負け

つばなしは好かんからな」

そういつて、右手を差し出す。

「あつ」

「ほれ、そつちも手え出し」

「あ、はい」

グツ

握り合った手のひらに力がこもっていた。

「次は、絶対負けへんからな」

「わ、私だつて負けませんから」

普段大人しい少女がはつきりと意志を露にしていた。

「じゃ、お互い、ルシオラさんの期待に応えなな」

「はいつ、私、負けませんよ」

恋する乙女たちの爽やかな夏の宣戦布告だった。

再び少年と少女たちがまみえるのは、いつになるだろうか？

それはまた別の物語……

花火と夏の思い出を

二〇〇六年八月十三日 投稿
二〇〇六年十月二十日 発行
二〇〇六年十月二十五日 改訂

投稿者 長 岐 栄
挿 絵 六 条 一 馬

発行 ザ・グレート展開予測シヨープラス

編集下請 サスケ

<http://gtyplus.hp.infoseek.co.jp/>

© Sakae Nagaki, Kazuma Rokujo 2006